研修医・指導医リレーエッセー⑳

新人指導医がおもうこと

川崎医科大学総合医療センター　シニアレジデント　河田真由子

川崎医科大学総合医療センター 内科（総合内科学２）の河田真由子です。岡山県出身で鳥取大学を卒業した卒後６年目です。消化器内科分野を担当しており、初期臨床研修より当院に勤務しております。前回執筆された出口先生は、初期研修医なりたての時期に当科に８週間研修に来てくれました。それ以降も当直業務を中心に何かと頻回なご縁があります。この前は一緒に焼き鳥をたくさん食べました！彼女は傍から見ているだけでも日々パワフルに楽しく過ごしている印象でこのまま２年目に向けて邁進してほしいです。

さて、初期研修医１年目は色んな意味で不安定になりやすいです。というのも医師としても社会人としても、病院の職員としても全部「１年目」に該当してしまいます。研修開始直後の当時の私は、早く何者かになりたい気持ちはあっても、体も頭も追いついていなくて苦戦しました。残念ながら医療現場のピンチはルーキーだろうが成長を待ってくれることはなく……。私の人生初めての当直では夜中に病棟急変症例に遭遇し、初めて担当患者を持った時の初めての週末は患者急変に遭遇し、当時はコロナ第１波で、混乱の中、救急当直でのfull PPE対応を初めて当院で導入した日も私の当直の日だったような気がします。

当院は二次救急で、救急外来はcommon diseaseの他に、超重症症例、教科書にはどう対応すべきかどこにも載っていない複合的な要素が絡んだ症例などバリエーションに富んだ症例で溢れています。１年目序盤はうまくできることの方が少なくて、自己嫌悪にも陥ったこともありました。ただ、それでも今日まで内科レジデントとして勤務を継続しつつ、今では初期研修医の指導にも関わらせていただけるようになったのは、当時より担当した患者さんから得た経験と、今日までご指導・サポートくださった先生・スタッフ各位、臨床医としての背中をみせてくださった先輩医師あってのことだなと有難く感じています。研修医の先生にはコロナが少し落ち着いた今の環境で経験できることを大事に、何でも挑戦してほしいと思っていますし、相談に来てくれた時には当時を思い出しながら一緒に考えるようにしています。

１年目の後半になってくると、全体が少し俯瞰してみえてきます。救急外来で初療の方針設定や患者家族への説明、入院後の対応など、初期研修医でも自信を持ってできることを増やしながら、臨床経過の先読み精度やアセスメントの丁寧さ、処置のスピード感など細部にもこだわってもらえるように指導している（つもり）です。１年間吸収できたことを来年以降の初期研修医にも伝えていってほしいです。

消化器内科（総合内科学２）としては、消化管・肝・胆膵と守備領域が広く、併せて一般内科疾患も担当しています。研修にきてくれた先生には病棟のマネジメントや検査・治療の計画など、他科をローテーションする際にも役に立ちそうなことを中心に、当時知りたかったことを思い出しつつ伝えるようにしています。ただ、緊急入院も多い診療科でもあり、出口先生が見たのはバタバタしているかっこよくない私の姿ばかりだった……と思います。それでも内科が好き！消化器ちょっといいかも？と言ってくれる彼女をはじめ、当院には頑張っている研修医が多く、その気持ちに応えていきたいですし、初心を忘れることなく精進を重ねていきたいと思っています。